豊かな感性を育む生活科学習のあり方

── 第２学年の栽培活動を通して ──

川　﨑　一　朗

１．生活科における栽培活動とは

最近の子どもたちをとりまく環境を見るとき，大人には都合がいいが，これから大人になっていく彼等にとっては，大切なことを経験できないことに気づく。そのひとつに，栽培経験がある。特に野菜に対する知識や理解は十分とはいえない。例えば，キャベツとレタスの区別ができない，大根が土の中にできることを知らない，ナスやキュウリがなっているところを見たことがないなど，このような例は枚挙に暇がない。それは，現代の都市の生活様式を反映しており，ある程度しかたのないことである。しかし，自分が口にする食物の成り立ちはどのようであるかということに思いを馳せ，一から自分で育ててみようとする経験も必要ではないだろうか。

学習指導要領の生活科，第２学年の内容(5)には，次のような記述がある。

> 野外の自然を観察したり，動物を飼ったり植物を育てたりして，それらの変化や成長の様子に関心を持ち，また，それらは自分たちと同じように成長していることに気付き，自然や生き物への親しみを持ちそれらを大切にすることができるようにする。

この中で，栽培活動の主なねらいは，生命あるものへの直接的な接触であり，親しみを持ち，変化や成長の様子に気付くことである。そのためには，子どもたちにとって栽培しやすく，枯死しにくいもの，また，収穫の味わえるものなど，栽培意欲を生み，楽しさを味わえるものを選んでいく必要がある。どのような植物を選び，どのような関わりを持たせていくのか，また栽培活動にあたっての教師の支援活動はどうあるべきか，そして，栽培活動を通して感性を育み生きる力をつかみ取っていくあり方を，実践を通して考えていきたい。

２．栽培活動の概要と研究の視点

(1)　栽培活動の概要

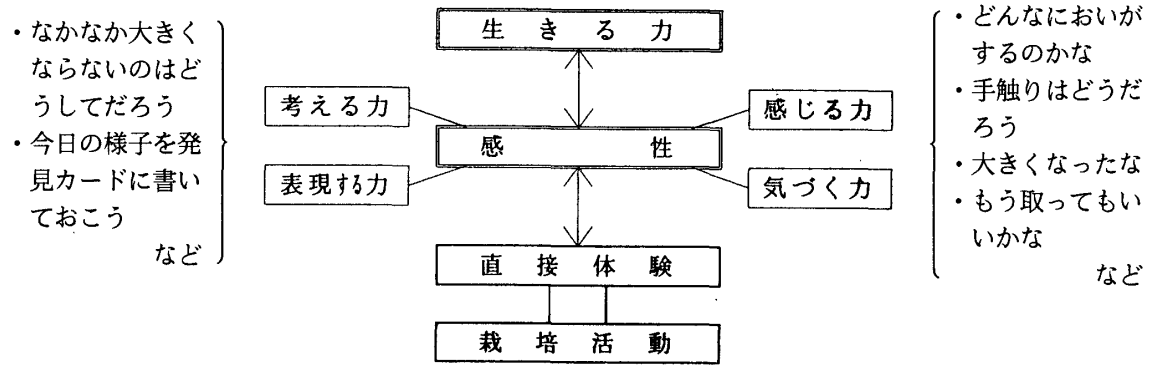
昨年度，本学級の児童はアサガオ，サツマイモ，球根類（チューリップ，スイセン，クロッカス，ヒヤシンス）の栽培を経験した。それまで，あまり栽培経験のなかった子どもたちだが，花が咲き収穫の喜びを感じることができた１年であったように思う。さらに，次の栽培活動を楽しみにしている子どもも見られた。今年度は，栽培していくのに少し抵抗感のあるものを考えた。また，収穫の喜びを味わえるもの（野菜）に絞り，子どもたちに自由に選択させた。栽培したものは，春植えの野菜の苗６種類と秋まきの野菜４種類である。

春に苗を植えたもの	キュウリ，ミニトマト，ナス，ピーマン，スイカ，メロン
秋に種をまいたもの	広島菜，カブ，大根，二十日大根

１年生の時の経験を生かし，これらの野菜と関わりを持つことによって，充実した直接体験ができ，収穫が味わえると同時に十分な達成感も得られることを期待した。栽培活動を続けていく過程や収穫を経験した後，生活科の指導理念にある『生きる力』に結び付く活動が生まれてくることも期待したい。

(2) 研究の視点－「豊かな感性を育む生活科学習」の具体像

感性は「価値あるものに気づく感覚」と定義される。[1] 価値あるものに気づくのは子どもであるが，子どもにとって価値あるものを学習材として提示するのは教師である。本稿での学習材は前述の野菜である。野菜が子どもたちにとって価値あるものとなり，野菜と関わりを持つ過程を直接体験としてとらえ，その中から「感じる力」「気づく力」「考える力」「表現する力」を育みたいと考えた。



「表現する力」には様々なものがあろう。文章表現，絵画表現，発表による表現，さらにはうれしい，悲しいなどの顔の表情も表現ととらえてもよいかもしれない。本実践では，主に，文章表現，絵画表現から，表現する力はどう育むことができたのか，ということも考察していきたい。

3．実践の実際

(1) 子どもたちが野菜を育てる必然性

生活科の栽培活動では，様々なものが使われている。これまでの理科の学習に見られたように，全国一律にヒマワリである必要はない。どのような植物を学習材として選ぶかは，児童の実態に合わせて考えていくべきものである。本学級の児童は，１年生の時の栽培経験があるので，少し手間のかかるものにしていこうという意図があった。子どもたちの栽培経験の中で，１番印象に残っているものはサイマイモであった。これは,「食べた」という経験がものを言っているのである。今年度の最初に,「今年も何か育ててみようか？」と投げかけたところ，全員が「食べることのできるものがいい。」という答えであった。「食する」という行為は，子どもたちの感性を大きく揺さぶったのである。「では，なにを育てようか。」と問いかけると，次のようなものがあがってきた。

モモ　リンゴ　カキ　クリ　ナシ

このことは，都市に生活する子どもたちの生活経験を象徴している。実際にこれらの果物を栽培し，収穫した子どもたちであれば，種（苗）を植えて１年で実がなるとは考えられないはずである。いろいろな農作物が季節を問わず店先に並べられ，お金さえ払えば簡単に手に入るのであるから，仕方のないことではあるが，自分の口に入るものは，どのようにしてできるのか，経験してほしいと考えた。中には，おじいちゃんやおばあちゃんのおうちで，野菜を収穫した経験のある子どもが数名おり，その時の様子を表現した。また，教師の体験も話すことによって，子どもたちの気持ちの中に，栽培に対する意欲が芽生えてきたものと感じた。おうちの人とも相談し，どんな野菜なら育てることができるか話し合い，前述の６種類のものが決まった。苗を植え，大事に育てていく過程で，子どもたちの感性を揺さぶることができるのではないかと考えた。

右の図は，秋まきの野菜の種を植えるときに子どもが表現したものである。この児童は，二十日大根を植えたのであるが，絵や文章から分かるように，二十日大根がどのようにして育ち，実を結ぶか，という栽培経験がないのであろう。おそらく，１学期にミニトマトを育てた経験から，きっと二十日大根も同じようにできるものと考えたのではないかと思われる。このように考える子どもたちがいるからこそ，野菜を育てる必然性があるとはいえないだろうか。自分の植えた野菜や，友達の育てた野菜の生長を間近に見ることにより，新しい発見をしていくことと思う。また，植える時に表現をしたものを振り返り，自分の思いを再確認することができると思う。

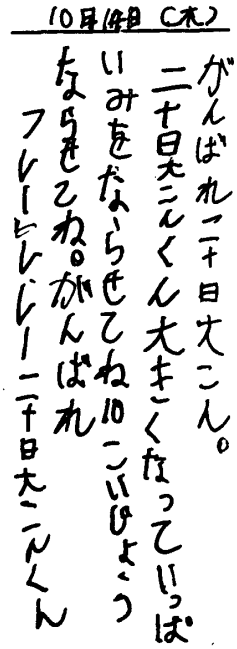


図　1

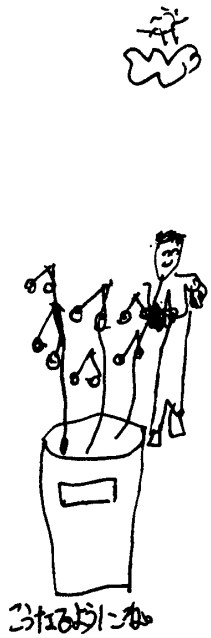


図　2

(2)　栽培活動の実際

第２学年の栽培暦

	春植え野菜	秋まき野菜
4月	苗	
	5/18　植	
5月	○　え	
6月	開花	
7月	収	
8月		
	穫	
9月		
10月		10/14
		○
11月		
12月		
		収
1月		
2月		穫
3月		

① 苗を植えるまで

漬け物樽を洗おう

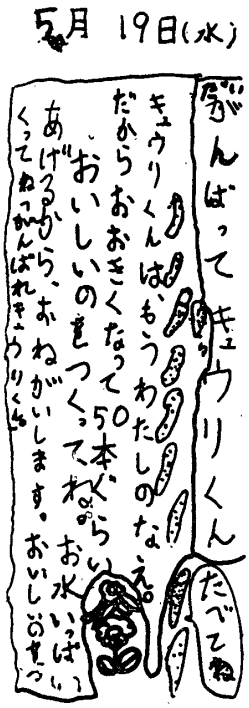
この苗をください

実際に苗を植えようとすると，困った問題が起きた。植える場所である。常に身近なところで関わりを持ち続けないと，感じたり，気づいたりすることは少なくなる。それで，土が多く入るものを探した結果，漬け物樽を植木鉢代わりにすることにした。２斗樽を使ったので，約40リットルの土が入った。これだけの量があれば十分に育つものと考えた。また，一人に一樽を持たせたので，自分のものと言う意識が強く持てたものと思う。

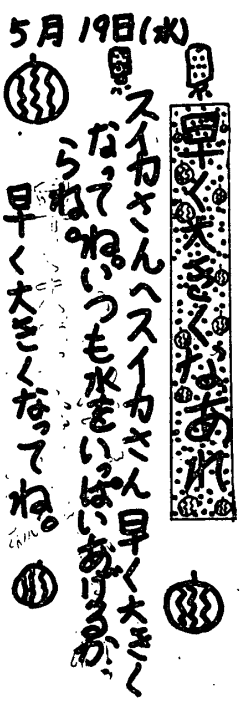
自分の植えたい苗はお店に自分で行き，購入させようと考えたが，持ち帰るときに痛んでしまう可能性もあるので，今回はお店の人に学校に来ていただき，出店を開いていただくことにした。その日，子どもたちは朝から，お店の人が来られるのを心待ちにしていた。そして，一人一人が自分で苗を選び，お店の人から苗を手渡ししてもらうことから，「自分の苗だ。」という気持ちが高まったということがうかがえた。

② 苗の植え付けのころ

生活科の学習で，感じたこと，気づいたこと，考えたこと，などを表現する方法はいくつか考えられる。具体的には，発言・身体表現・絵画表現・文章表現などである。これらの中で，時間が経過した後自分の思いや願いを振り返るとき，絵画と文章で表現したものを使うことができる。児童は植物を育てる前に,「育ってほしい」という願いをもつ。その願いは様々である左の２枚のものは苗を植え付けるときに表現したものである。これは『お願いラベル』と呼んでいるもので，Ｂ６の半分の大きさで，白いプラスチックの板に油性のマジックで表現していく。半年は十分に屋外での使用に耐える。児童は苗を植える際,『お願いラベル』を樽に置く。(左の写真を参照）水やりなどの世話をしにいくたびに最初の思いや願いを確認することができる。

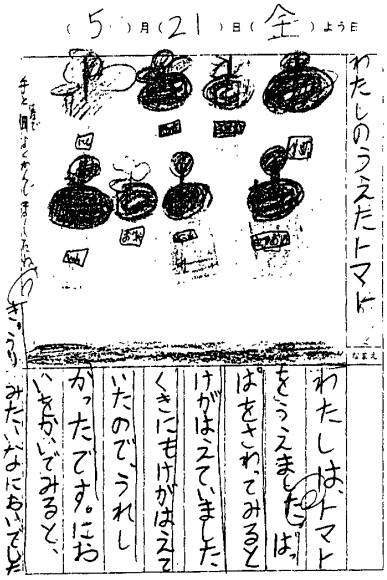


がんばってキュウリ君



早く大きくなあれ

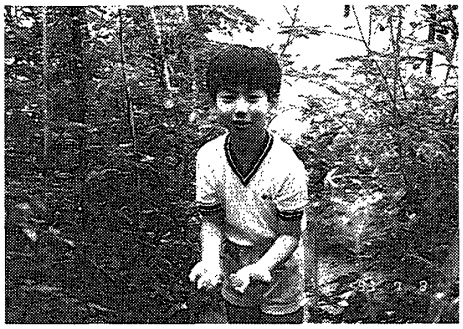
左の子どものお願いラベルを見てみよう。お店の人から買って,「自分の苗」という意識が芽生えている。右の子どものものは，題にスイカの模様をつけるなどして，表現に工夫が見られる。どちらの子どもも，世話をする内容は，水やりのことであるが，このことは，これまでの栽培経験を裏付けている。１年生の時の経験では，主に水やりをするくらいで，ほかには取り立てて世話をしたということはない。今回の栽培活動では，肥料をやったり，害虫の駆除をしたりするなどの経験をさせた。左の写真は，苗を植えたときのものである。お願いラベルとともに，期待を膨らませて植えているところである。この時の苗は，まだまだ小さいものであるが，子どもたちは苗に対して十分に「感じ」「気付き」「考え」「表現」している。左の発見カードにも，そのことがよく表れている。この発見カードをかいたのは，苗を植えた翌日の５月21日である。カードにかかれている内容を見ると，手触りとにおいのことが記述されている。五感を使って感じ，子どもの感性が揺さぶられている場面である。

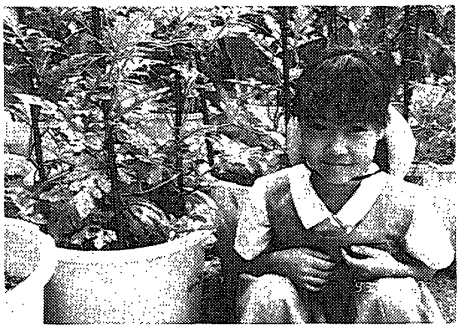


この子どもが，自分の苗と対峙し，苗と関わった最初の表現活動ともいえよう。最後の一文には,「においをかいでみると，きゅうりみたいなにおいでした。」とある。この子どもが植えたのはミニトマトである。しかし，キュウリみたいな臭いだったのである。このことは,その子どもの感じ方なので,大切にしていきたい。「ミニトマトを植えたはずなのに，キュウリの臭いがするなんて変だね。」と言うか,「どれどれ，どんな臭いがするのか，先生も臭ってみよう。」と言うかで，これからの子どもの栽培意欲，苗との関わりの度合いは，大きく左右されよう。子どもと共に感じ教師が感じたことで，また子どもが感じ方を深めていくような支援に心がけていきたい。

③　収穫の頃

約40リットルの土に植えたそれぞれの苗は，予想以上に生育してきた。6月14日には（苗の植え付けが5月18日）初めてキュウリを収穫することができた。この頃から，ナスも収穫を始めることができた。左の図は最初に収穫ができた子どもの発見カードである。キュウリをよく見て，一生懸命に表現しようとしたことが，絵から伝わってくる。食べ方は,「キュウリの酢の物」である。その時,「スーパーのよりおいしかった。」という感想を持っている。このことは，客観的に「おいしい」と思い，また一方で自分の関わりから思いを込めて「おいしい」と感じたことであろう。自分が大切に育ててきたのであるから，真っ先に家に持ってかえって，食べてみようと思うのが自然である。「収穫したものをみんなで食べよう」という設定も考えられるが，そのためには，学級園などで育て,「みんなで育てたもの」という意識が持てないと，充実した活動にはなりにくいと考える。今年は長雨の影響でキュウリに病気が発生してしまい，7月に入ってからはあまり収穫できなかった。1人当たり15本位は持ってかえれたようである。今度はそれに代わって，ミニトマトとピーマンが収穫できるようになった。ナスは平均して収穫することができた。左の写真は7月8日のものである。トマトがぐんぐん大きくなり，子どもたちの背をはるかに越していることがわかる。これから，ミニトマトは最盛期を迎え，2学期が終わるまで収穫することができた。左の写真は7月20日，終業式の日のものである。実は，スイカとメロンについては，収穫できるかどうかが心配であった。その心配をよそに，大きさこそ小振りではあったが，甘いスイカとメロンを収穫することができた。漬け物樽で野菜を育てるという栽培方法は，十分に子どもたちに満足感や達成感を育てることができたと考えられる。また，教室の側に樽を置いたので，野菜に十分関わり，成長に伴う変化も知ることができたものと思う。


ミニトマトができたよ


スイカが大きくなったよ

4．考察－栽培活動を通して,「感性」と「生きる力」について－

5月に始まった栽培活動は，夏から秋にかけて最初の収穫が終わり，現在，秋まきの野菜の収穫をしているところである。子どもたちは，栽培活動という直接体験を通して，感性を育み，生きる力をある程度つかみ取ってきたものと思う。嶋野道弘は「豊かな感性は，身近な社会や自然の中で感動したことを，教師と子どもとで分かち合うことが大切である。子どもは，教師が花の美しさに感動したり自然の不思議さに驚く姿などを見て『なるほど』と感じていく。感性は，身近な社会や自然の中で感応・感化して養われる。しかも，それは幼い子ども時代にこそ必要なことである。」と説いている。[2] 教師と子どもとで分かち合い，さらに，保護者を巻き込んで感動を共有していくことができれば，より「豊かな感性」が育まれ,「生きる力」をつかみ取っていくことのステップとなりはしないかと考える。次の作品を見てみたい。

いえにかえって，ランドセルをあけてみて，キュウリを出したら，
「ワァー，大きいキュウリ。」
と，おかあさんが，びっくりしました。すると，わたしは，
「すごいでしょう。2本もとれたのよ。」
と，じまんしました。さっそく，おばあちゃんが，
「キュウリなますと，サラダにしよう。」
と，言ったので，わたしはキュウリをきるのをてつだいました。
まないたの上にキュウリをのせて，左手はねこの手，右手はほうちょうをもってきりました。はじめは手きりそうでこわかったけど，だんだんたのしくなりました。つぎにしおもみをしてしぼって，すの中につけました。さいしょに，おとうとがたべて，
「ちゅういい，ちゅういい。」
と，言いました。それから，みんなが，
「おいしいね。」
「ハリハリして，しんせんだね。」
「スーパーのより，あまいね。」
と言ってくれました。
わたしは，いつもはキュウリをたべないけれど，きょうはキュウリをたべてみました。みんなが言ったとおりで，スーパーのよりおいしかったです。まい日水をやったりして，大せつにそだてたかいがあったと思いました。かぞくの人によろこんでもらえて，とてもうれしかったです。
（下線は筆者）

この子どもは，キュウリがあまり好きではないのであるが，自分で関わりを持ち，自分で育てたという思いが，「自慢」する事に結び付いたものだと考えられる。〜〜の部分は，おうちの人が感動を共有した場面である。おかあさん，おばあちゃん，弟の3人と関わりを持っている。文章には出てこないが，おとうさん，おじいちゃんもいたのかもしれない。-----の部分は，生きる力に結び付いていく生活力ともいうべき場面である。危なっかしい手つきで包丁を持つ子ども。その側に，おかあさん，おばあちゃんの優しい眼差しが注がれている。そして自分で作ったキュウリの酢の物を食べたときの思い，それまでの関わりの過程，家族との感動の共有などが，十分伝わってくる。

本実践では，栽培活動をもとに，感性を育む生活科学習のあり方を探ってきた。一人一人が深く関わりを持ち，野菜を育てていく過程の中で「感じる力」「気づく力」「考える力」「表現する力」はある程度育ってきたと考える。その中で，前述の文章表現をした子どものように，家庭の協力も得て，「生きる力」をつかみ取ろうとしている子どもたちも見られてきた。その一方で，野菜との十分な関わりの持てない子どももいる。関わりが不十分なので，活動が充実していかないのである。それには，教師の支援のあり方，感動を共有する姿勢，家庭との連携など，様々な問題がある。子どもたちの豊かな感性を育み，生きる力をつかみ取らせるために，学習材が，本当に十分な活動を保証するに耐えうるものか，そして，子どもたちが日々の学校生活を，本当の意味で心を解放した状態で過ごすことができているのかということについて，さらに実践を重ねていきたい。

《引用文献》

1）片岡徳雄　『子どもの感性を育む』　日本放送出版協会　1990年　P.74〜P.75
2）嶋野道弘　『生活科教育の研究　授業づくりと評価，大学の生活科をめぐる問題』　愛知教育大学教科教育センター　1993年　P.7〜P.8